ジャンル：民話

石ぼとけ様

いまから、およそ二百年ぐらい前のことです。引野の川尻、古東寺堂（ことうじどう）の前あたりは、昼でもなお暗いほどの、雑木林で、気味の悪いところであったそうです。ところが、その森の中に、一本ほど引野から、木床（きどこ）へ出る里道がありました。村人たちはここを通らないと木床に出る道がほかになく　近道というより、ここが、たったひとつの大切な道でした。むかしは、馬道三尺（やく一メートル）といって、このはばになると誰が通ってもよいことになっていました。

この暗い道も　馬道になっておりましたので、いつでも通ってかったのですが、昼でも暗いし、まして夜ともなると、いっそうこわく、里人たちはおそれて、夜はできるだけ通らないようにしていました。

そのうちに、いつとはなしに、こんな、うわさが里人たちの　口から口へ、伝えられるようになりました。

「なんでも　あそこの道を通ると、お化けがでるぞ。」

「そのお化けは小豆研ぎをしているぞ。」

こんなうわさでした。まこと、ここを通ると、「シャッ、シャッ、シャッ」と小豆を洗う音がするのです。しかし、里人たちは、ここを通らねばならず、こわくて　こわくて、困っておりました。

そのころのことです

ある夜、このあたりの庄屋さんがねれていたところ、こんな夢をみました。まくらもとに、白い衣を着たお坊さんがあらわれ、

「わしの墓が、ずうっとむかし、明石川溜池の堤防が切れて　押し流された。その墓をこの土地の人がしらんと　川尻の溝の橋桁に、使っている。それで通る人々はこのわしの墓を、足でふんで通るのでとてもかなしい、あんたの手によって　もとのとおりの墓にしてもらえまいか。」

といって、すうっと消えていってしまいました。庄屋さんは、びっくりして、とび起き、あたりを見まわしたけれど、もうそのお坊さんの姿はありませんでした。

そこで、さっそく　庄屋さんはそのことが気になり、夜の明けるのをまって、そこへ行ってみました。いってみると、なるほど、墓のほとけ石らしい大きいのが、橋げたにつかわれていたのでした。そこで、庄屋さんは　びっくり、

「このことだな。あぁ　もったいない」と思い、すぐ近所の人に　手つだってもらってとりかえました。ほとけ様はきれいに洗い、台になる石を取り寄せて、その地へりっぱな墓を建てました。そしてねんごろにお寺で、お経をあげてもらいました。

庄屋さんがみた夢の日の八月十九日を命日として、いまでも、その供養がこの地でつづけられているということです。

それからは、一本道のおばけの話もとんと消え、村里の人は安心して通れるようになったそうです。

出典　「阿知須ふるさと今昔　民話編」
平成十一年二月　発行
阿知須町教育委員会　発行・編集